

巻頭言 「ホワイトアルバム」

宇野 元

先月、旧友と楽しいときを過ごしました。まだ明るい夕方、須磨海岸の、松林の木陰のベンチに腰掛けておしゃべりしていたら、日の光が横から照りつけたので、林をくぐり出て話をつづけました。ふと、あれは潜水艦じゃないか？ と友人がその方角を指さし、私は近眼の目をしばたいたりしながら。鮮やかな濃い青の海。遠くに、ゆっくり動いている白い船。いつのまにか、話題はビートルズをめぐるものになり、「ホワイトアルバム」に及びました。1968年。ビートルズは解散の危機に直面していました。「ホワイトアルバム」には、その状況が切実に刻まれています。アルバム作りの途中で、彼らはばらばらになりかけます。演奏を続けられなくなっても少しも不思議ではありませんでした。ところが、彼らの作品の中でもまれな、充実したアルバムが生まれました。

崩壊の寸前まで行きながら、これまでにない作品が生まれた、たしかにこのあとも素晴らしい作品を生みだしているが、内面的にみるなら、バンドとしてのありかたは終わっているね、と偉大なバンドへの愛をもって友人が語るのを傾聴しました。この話は、語り手と聞き手にとって、音楽談義として面白いだけでなく、おのずと人生に触れています。小さな危機の経験があります。いわば、小さな死。より正確に言えば、小さな死の寸前。けれども、その時にはわからない、ひそやかな支えに付き添われていた経験。

私たち誰しもが、ときに、深いところに置かれます。立ち上がれないだろう。そう思うような。周りからも、そうみなされるような。それほどに無力な、また、援軍を得られない経験をします。けれども、そのとき、見えない力が働いています。痛手からの回復の道も神秘的です。過程の中にあるときは、はっきり見えません。それはちょうど、来た道をあとから振り返るとき、はじめて、大きなカーブを描いているのがわかるのに似ています。私たちの歩みは、私たちの目には隠れた奇跡に守られ、付き添われています。

友人から、詩を書いているか？ とたずねられました。ときどき、訳詩を手直ししている、と答えました。上着の内ポケットから、ボンヘッファーの「よき力」に私訳を書き加えた紙を取りだして。「だから、そのたびに詩の言葉がちがうよ。」

「よき力に 誠実に静かに 取り囲まれ
奇しくも守られ 慰められ」